

## 編集後記

オイル・ショックに始まった波乱に満ちた昭和49年も暮れようとしている。"やっと、ひと区切りの幕が降りてくる"という感慨がひとしお強い。石油危機に触発された不況下のこの一年間は、実に苦渋に満ちた厳しいものであった。暗く陰湿極まりない不愉快なニュースは掃いて捨てるほどあったが、明るく楽しいニュースは、残念ながらあまり耳にできなかった。目をみはるような金権選挙と大型違反、買いだめ売り惜しみと物価狂乱、放射線もれによりスクラップと化した原子力船「むつ」と、地元漁民のエゴイズム、一層凶悪化した殺人事件や保険金詐偽事件、いくつかの爆弾テロや文世光事件、果ては、一国の総理の金脈に端を発した政変劇、そして最後には、科学の粋を集めて作られたという水島コンビナートの重油流出事件と、沿岸漁民の柄杓でその重油をくみ上げる悲しげな姿。高度の科学技術と素朴な漁民の手という、いかにも現代を風刺するようなコントラスト。世はまさに、しらけ切った"不信の時代"に埋没してしまうのではないかとさえ思えるような事件の連続だった。このような世相の中で、特に痛切に感じられたのは、科学技術に対する極度の不信感と、あらゆる角度からの企業に対する疑惑であったといえる。しかし、新しい資源を開発したり、資源の再利用を可能にするのは科学技術そのものであり、その意味で、科学技術は無形の資源そのものでもある。今日ほど、科学技術に対する信頼を取戻すことが急務な時はあるまい。また、同時に、企業とは何か、企業とは何をなすべきかを真剣に問われている時でもある。今こそ我々は、叡智をふりしぼって、住みよい社会を構築して行かねばならない。「諸悪の根源」とまでいわれた石油業界のヤミカルテル初公判が、やっと12月20日に開かれるし、一方では、独禁法改正をめぐる動きが軌道に乗り始め、加速的にその作業が進められつつある。今後のなり行きを注目したい。このような騒然とした時の流れにもかかわらず、先生方より多くの玉稿をお寄せいただくことができた。記して感謝の意を表する次第である。

(T・O生)

流通経済論集 Vol. 9, No. 3 (通巻第32号)

昭和50年2月25日発行

非売品

編集兼発行所

製作所

流通経済大学学術研究会  
茨城県竜ヶ崎市字平畑120番地  
電話 竜ヶ崎 (02976-2) 3251 (代表)  
財団法人 東京大学出版会  
東京都文京区本郷7丁目3番地の1 東大構内  
電話 東京 (03-811) 4281